



若者世代の出身地に対する地域認識とその形成過程 ： 兵庫県姫路市を事例として

岡部, 爽

(Citation)

兵庫地理, 68:97-112

(Issue Date)

2023

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482459>



若者世代の出身地に対する地域認識とその形成過程

—兵庫県姫路市を事例として—

岡部 爽

I. はじめに

1) 研究の目的

人がある土地に対して抱く認識（イメージ）については、これまで数多くの議論がなされてきた。人がある特定の空間に意識を向ける際、対象としての空間の部分と、主体に生まれたその空間に対するイメージは対応しており、この瞬間に生起するのが「場所」という概念である（内田 1987 : 2）。そして、「場所」は実在する空間を指すとともに場所イメージを内容として持ち、両者は不可分の関係にあるとされる（内田 1987 : 2）。

これを言い換えると、「場所」は「人間の具体的な関わりを通して周囲の空間や環境から分節させた、個人や特定の人間集団にとって特別の意味を帯びた部分空間」であり、「直接関わり、関係を取り結ぶ当事者の心情や観念として生起し、そのありようは当事者の場所をめぐる感情や行為、当事者とともにその場所に関わる他者との共同主観的な意味づけ、そしてその結果としての景観表出のあり方やその背後に潜む意味を通して感取され解釈できるもの」と定義される（高野 2013）。

つまり、客観的な実在としての空間に主体がそれぞれの経験や心情による意味付けを行うことで、「場所」が生まれるのである。人々による「場所」の獲得を検討した事例として、佐賀県馬渡島の島民が村落空間に付与する様々な意味を、現地での聞き取り調査と参与観察によって明らかにした研究が挙げられる（今里 1990）。また都市域では、茨城県水戸市において、水戸駅が若者の居場所であり、「若者と警察官、若者同士という二重の人間関係が展開される中で作り出される動態的な空間」であることが指摘されている（市川 2009）。さらに杉山和明氏は、富山県富山市で夜中の富山駅周辺にたむろする若者が、「駅前」という空間に祝

祭の場を見出すとした。この祝祭の場は、日常では満たされない願望を充足させる可能性を持つ（杉山 1999 : 12）。

本稿では対象地を兵庫県姫路市に設定する。姫路市は、播磨地方で「一番近い都会」¹とも称される県内でも有数の都市である。多くの人々に認知されている姫路市という空間では、水戸市や富山市の駅前のような特有の「場所」が生み出されているのか、そしてその「場所」はどのような過程を経て形成されるのかという2点を検討したい。

人々が姫路市に対して抱く認識は、これまでも調査研究が行われている。例えば、姫路市による「姫路市まちづくりのための市民アンケート調査」（2018 年実施、以下まちづくりアンケートと略²）や、姫路市外出身の市内で1人暮らしをする大学生を対象とした居住満足度と定住意欲の調査がある（壽賀ほか 2022）。この2つの調査結果より、姫路市に対する地域認識の傾向として以下の2点を指摘できる。すなわち、①姫路駅周辺地域は利便性が高いと認識されている、②若者の定住意欲や愛着の度合いが小さい、ということである。しかし、どちらの調査もアンケート調査を中心とする定量分析であるため、上記の傾向が生まれる理由や背景までは明らかにされていない。そこで筆者は、姫路市の地域認識が形成される要因について3つの仮説を立てた。

第一の要因は姫路駅周辺地域（以下、駅前と略³）の存在である。駅前は、一般に利便性が高いと認識されているほか、市中心部に位置づけられるため、居住地にかかわらず多くの人々が日常的に経験する空間である。そのため、この駅前の認識が、姫路市の地域認識全体にも結び付いていると推測される。第二の要因は姫路駅の立地である。後述するが、姫路駅からは京阪神、東京、岡山といった主要都市へとスムーズに移

動できる。そのため、姫路市一带に住む人々は様々な地域に移動し、他の都市を経験する機会に恵まれている。この経験が姫路市に対する地域認識にも何らかの影響を与えていると考えられる。第三の要因は移動の経験である。前述の調査では、若者の姫路市への定住意欲は比較的小さい。それゆえ、姫路市から移動する実態やその意志への着目によって、若者を中心とする人々の地域認識を理解する一助になると期待される。本稿では、これらの仮説を聞き取り調査に基づいて検討し、駅周辺を軸に共有されている「姫路」という「場所」の姿を明らかにする。そして、さらにその「場所」のあり方に影響を与えている要因を紐解くことを試みる。

また、本稿では特に10代後半から20代前半の若者に着目する。対象を若者に限定するのは、彼らが移動と密接に関わる世代だからである。若者は進学や就職といったライフコースの重要な局面において、出身地から様々な地域へと移動するという特徴を有する(山口 2018)。姫路市の地域認識の要因として、主要都市へのアクセスが良好な姫路駅の立地と移動の経験があると筆者は想定している。そのため、他の世代よりも移動の機会が多い若者に焦点を当てるのが適切であると判断した。



第1図 姫路市の位置

地理院地図より筆者作成

本稿は以下のように構成される。まず、次節で姫路市の概要を確認した後、第3節で筆者による聞き取り調査の方法を述べる。第II章では、姫路駅周辺地域が若者の地域認識に与える影響について言説分析を行う。同じく第III章では言説分析に基づき、姫路駅の立地、移動の経験という要素と若者の地域認識の関係性について検討する。続いて第IV章において、姫路市に対する若者の地域認識の実態と形成過程を提示する。最後に第V章で、本稿のまとめを述べる。

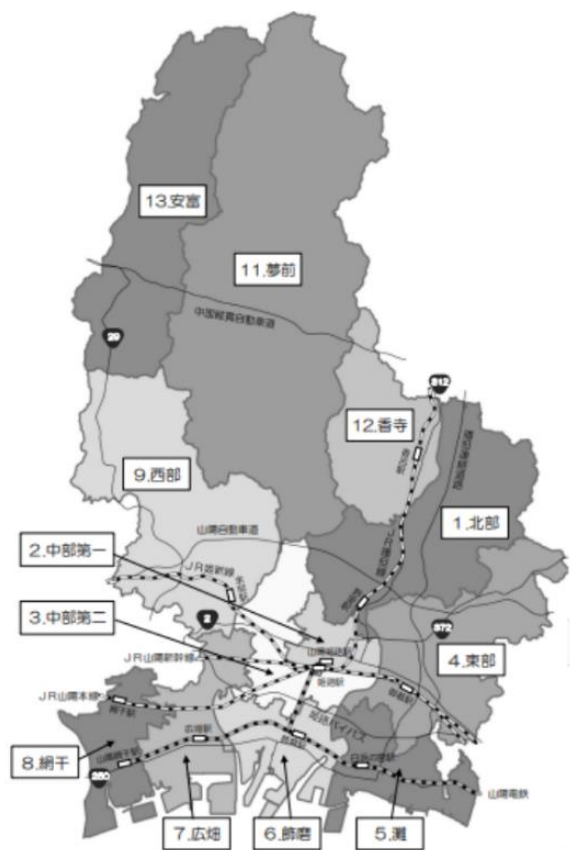
なお、以下では「姫路市」と『姫路』という表現を使い分ける。「姫路市」は行政的な区分としての姫路市そのもの、つまり空間としての姫路市を指し、『姫路』は若者が意味付けをした上で捉えている姫路市、つまり「場所」としての姫路市を指す。

2) 姫路市の概要

姫路市は兵庫県の南西部に位置する(第1図)。人口は約52万人であり、約150万人の神戸市に次いで県内第2位の規模を誇る⁴。1996年から、政令指定都市に準ずる権限を持つ中核都市に移行した⁵。著名な文化財として「灘のけんか祭り」や「魚吹の提灯祭り」といった秋祭りや、世界文化遺産の姫路城などが挙げられる。

姫路市の中心部はJR姫路駅(以下姫路駅)周辺である。姫路駅は新快速電車の停車駅であり、三ノ宮、大阪、京都まで乗り換え無しでそれぞれ40分、1時間、1時間半で移動することができる。また、新幹線の停車駅でもあるため、のぞみ号を利用すれば東京まで3時間、岡山まで20分で移動可能である。山陽電鉄の山陽姫路駅も、姫路駅から徒歩3分程度の距離に位置する。駅周辺には、複合商業施設のピオレ姫路(以下ピオレ)をはじめとしていくつかの商業施設が立地しており、休日には買い物客で賑わう光景が見られる。

さらに、姫路市は播磨地方の中核都市としての役割も担っている。播磨地方には兵庫県南西部に位置する13市9町が含まれる⁶。姫路市は、「本市が『連携中枢都市』として、播磨圏域の市町と、対等な関係のもと独立的・主体的に連携し、産業界、大学、金融機関などとも協力して、播磨圏域の経済を活性化し、圏域の



第2図 市内ブロック区分

「まちづくりアンケート」より引用

魅力を高めるとともに、住民の皆さんが安心して快適に暮らすことのできる圏域づくりを進めます」（姫路市 2015）と述べている。

3) 聞き取り調査の概要

若者の地域認識の実態や形成過程を詳細に読み解くには、若者1人1人が持つ具体的な経験や、それにまつわる感情の分析が有効と考えられる。そこで、筆者は姫路市出身の若者8名を対象に聞き取り調査を実施した。実施時期は

2022年9月から11月

である。対象者の概要を第1表に示す。なお、第1節で触れたまちづくりアンケートでは市内を13のブロックに分けており（第2図）、第1表でも出

身地の分類にこれを援用した。

Aさんは20歳の女性で、駅前が含まれる中部第一ブロック出身である。現在は香川県高松市で1人暮らしをしながら、高松市内の大学に通っている。Bさんは18歳の女性で、中部第一ブロック出身である。現在は大阪府枚方市で1人暮らしをしながら、枚方市内の大学に通っている。Cさんは21歳の女性で、たつの市と隣接する網干ブロック出身である。現在は鳥取県米子市で1人暮らしをしながら、米子市内の大学に通っている。Dさんは21歳の女性で、姫路市役所や兵庫県姫路総合庁舎が立地する中部第二ブロック出身である。現在は神奈川県横浜市で1人暮らしをしながら、横浜市内の大学に通っている。Eさんは22歳の女性で、広畑ブロック出身である。広畑ブロックは、駅から車で西方向に約20分程度の距離に位置する。現在は東京都板橋区で1人暮らしをしながら、都内の企業に勤務している。なお、大学時代は姫路市内の自宅から岡山県の大学まで通学していた。Fさんは21歳の男性で、広畑ブロック出身である。現在は姫路市内の自宅から神戸市の大学へと通学している。Gさんは19歳の女性で、中部第一ブロック出身である。現在は姫路市内の自宅から神戸市の専門学校へと通学している。Hさんは22歳の女性で、中部第一ブロック出身である。現在は姫路市内の自宅から岡山県の大学へと通学している。

調査は、筆者がいくつかの項目について質問をし、それに対して対象者に自由に話してもらう形式で進めた。質問内容は多岐に渡ったが、主に第1節で提示した仮説に関する内容を中心とし、実施時間は1時間から1時間半程度である。

第1表 聞き取り調査対象者の概要

	年齢	性別	出身ブロック	現住地	通学先・勤務先
A	20	女性	中部第一	香川県高松市	香川県高松市
B	18	女性	中部第一	大阪府枚方市	大阪府枚方市
C	21	女性	網干	鳥取県米子市	鳥取県米子市
D	21	女性	中部第二	神奈川県横浜市	神奈川県横浜市
E	22	女性	広畑	東京都板橋区	東京都内
F	21	男性	広畑	姫路市	神戸市
G	19	女性	中部第一	姫路市	神戸市
H	22	女性	中部第一	姫路市	岡山県

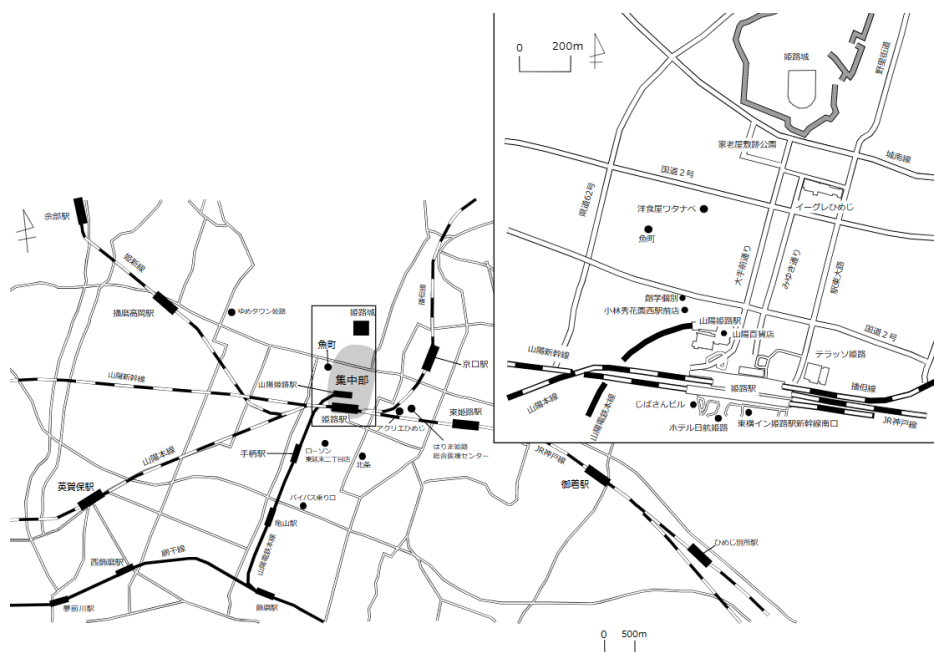
Ⅱ. 駅前はどのような場所か

1) 駅前とはどこか

駅前について検討するにあたり、若者が駅前という言葉聞いて想像する具体的な範囲を把握しておく必要がある⁷⁾。ケヴィン・リンチは、都市のイメージの要素を分類するための形態のタイプとして、パス、ランドマーク、エッジ、ノード、ディストリクトの5つを挙げた(リンチ 2007:56)。駅前の範囲を検討する上で特に重要なのはランドマークである。

対象となる都市に詳しい人

ほど、道しるべとしてランドマークに頼る傾向があるという(リンチ 2007:98)。そのため、姫路市で生まれ育ち、何度も駅前を経験しているであろう若者は、何らかのランドマークを手がかりに駅前という空間を思い描いているはずである。よって、聞き取り調査では駅前と聞いて想像する範囲の東西南北の目印を尋ねた。得られた回答をまとめたのが第2表であり、地図上に示したのが第3図である。これらの回答のうち、多くの対象者で共通している目印を東西南北でそれぞれ1つずつ選び、その目印どうしを繋いだ範囲を、一般的に若者が駅前として認識を共有している範囲



第3図 対象者にとっての駅前の目印

地理院地図より筆者作成

であると定義した。

まず、8名中5名が東の目印として複合商業施設のテラッソ姫路(以下テラッソ)を回答した。テラッソは姫路駅の250m東に位置する。また、Cさんは野里街道から駅東大路にかけての通りが駅前の東端であると答えたが、テラッソは駅東大路に面して立地するため、想像する範囲はおおむね共通すると考えられる。よって、東端はテラッソであると定める。次に、西は4名が大手前通りと回答し、Bさんも「家老屋敷跡公園の通り」という言い方で大手前通りを挙げた。Dさんは山陽百貨店と答えたが、山陽百貨店は大手前通りの

西側に面する。そのため、大手前通りを西端と定める。南は他の方角と比べて、回答にばらつきが見られた。分類すると、姫路駅南口と回答したAさんとBさん、姫路駅南側のホテルと回答したDさん

第2表 対象者にとっての駅前の目印

	東	西	南	北
A	テラッソ姫路	洋食屋ワタナベの通り	姫路駅南口ロータリー	イーグレひめじ
B	テラッソ姫路	家老屋敷跡公園の通り(大手前通り)	姫路駅南口のバス停	イーグレひめじ
C	姫路東高のある通りを駅まで真っ直ぐ行くライン(野里街道~駅東大路)	大手前通り	ローソン東延末二丁目店	姫路城
D	テラッソ姫路	山陽百貨店	東横イン	姫路城
E	はりま姫路総合医療センター	ゆめタウン姫路	バイパス手前(駅南大路~姫路バイパス乗り口)	姫路城
F	テラッソ姫路	山陽百貨店	北条の友人の自宅	姫路城
G	アクリエひめじ	創学個別から小林秀花園西駅前店周辺(忍町~西駅前町周辺)	じばさんビル	イーグレひめじ
H	テラッソ姫路	魚町	東横イン、ホテル日航姫路	イーグレひめじ

とHさん、その他の場所を回答したCさん、Eさん、Fさん、Gさんとなる。しかし、姫路駅南口と姫路駅南側のホテルは徒歩1分ほどの距離であり、Gさんが回答したじばさんビルも姫路駅南口から徒歩1分ほどの距離にある。つまり、5名が姫路駅南口付近を駅前の南端として想像している。また、姫路駅南口以南を回答した対象者も、駅前で経験語る際には姫路駅より北側の空間にしか言及しなかった。したがって、南端は姫路駅南口であると定める。最後に北であるが、姫路駅の800m北に位置する総合施設のイーグレひめじと姫路城とで、4名ずつに回答が分かれた。そこで、2ヶ所の中間にある城南線を北端として定める。これらの4つの目印を結び、その範囲を図示したのが第4図である。



第4図 若者が認識する姫路市駅前の範囲

地理院地図より筆者作成

2) 駅前の語られ方

では、駅前は対象者によってどのように語られるのだろうか。大きな特徴として、駅前に対する肯定的な語りと否定的な語りが混在する点を指摘できる。肯定的な語りの主な理由は駅前の利便性である。Bさん、Cさん、Dさんによる駅前の利便性に関する語りを以下に示す。

筆者：結構高校の時はさ、姫路ダサとか姫路しょぼ一とか思ってたけど、そのしょぼさとかっていうのは今も残ってる？

B：や、それが、しょぼいっていうより落ち着いててちょうど良いみたいな。アクセスも良いし。大阪は、楽しいけどなんかもう疲れるからさ。

B：(大阪は) パワー凄いやん、人の行き来もそうやし。やっぱ人集まる都会はしんどい。

B：あと、なんやろ、まあ便利ですよって感じ。新幹線通ってるし、買いたいもん揃うやん、服も、服はまあ、しょぼいけど。

Bさんは大阪での生活を経験してから、姫路市に実際に居住していた時には「しょぼい」と感じていた駅前の規模を、「ちょうど良い」と感じるようになったと語っている。そして、新幹線が停車し、一通りの買い物済ませられる駅前は便利であると感じている。

筆：Cさん自身は鳥取に引っ越してから姫路に対するイメージとか、姫路への気持ちとか思い入れみたいなのって変化はありましたか？

C：多少、都会、なのかな？みたいなことは思ったかな。駅周りはな。多少。都会かな、映画館ちゃんとかあるし。

筆：え、鳥取って映画館ないん？

C：いや、あるけどめっちゃ遠い。

筆：米子って、いうたら姫路駅みたいなスポットに行くには今住んでる所からどれくらいかかるん？

C：姫路駅みたいなスポット、

筆：なんかこう、買い物ができたり、ちょっと友達と一緒に時間過ごしたりみたいな。

C：あ、ぎり日吉津のイオンかな。そこに映画館あるんやけど、(中略) まあ一田舎。遠い。米子の方からは遠い。米子駅周辺からはちょっと

遠い。

筆：米子駅周辺は
何かあるん？

C：うーん、ビジネスホテル、とか
やな。居酒屋、
ほんまに駅周

辺になったらそれくらい気がする。

(中略)

筆：なるほど。じゃやっぱそういうところに比べた
らな、便利よな、姫路の方が。

C：そう。駅周りに買い物に行けるところがない。
そもそも米子駅にピオレみたいな駅ビルみた
いなのが無い気がする、多分。

B さんとは対照的に、C さんは鳥取県へ転居した後、
駅前を「都会」と感じるようになった。その理由とし
て、現在の居住地付近には駅前のように映画鑑賞や買
い物ができる空間が無いことを語っている。

D：確かに横浜とか東京出た時って凄い感動があ
ったんよ。(中略) やけど、じゃあそこで買い
物しますとかってなった時って、なんかさ姫
路とほぼ変わらんくない？姫路も結構服屋
さんとかもさ、いっぱい入っとるしさ。

D：あそこ〔筆者注：ピオレ〕って全部一気に点在
してくれとるやん。(中略) でも、建物がいっ
ぱいあったりしたら移動しなあかんわけよ。
(中略) ってなった時に、めんどくせつとは
めっちゃ思う。移動がただただ増えるだけや
し、やっぱ横浜とか人めっちゃ多いやん。(中
略) ってなったりした時に、いやこれ、姫路
結構便利なんかなみたいなのをめっちゃ思
った。良い感じにちいちゃいけど全部あるか
ら。

D さんは憧れの存在であった東京や横浜での買い物
先が、実は駅前にも存在することに気付き、「ほぼ変わ

第3表 ピオレ内ジャンル別店舗数

	ファッション	雑貨 ファッショングッズ	コスメ ビューティー	スイーツ 食品	カフェ レストラン
店舗数	81	47	20	29	31

ピオレ公式ホームページ (<https://piole.jp/himeji/search/floor.html> (2022年12月26日最終閲覧)) より
筆者作成。なお、1店舗で複数ジャンルの商品を扱う店舗は各ジャンルで1回ずつカウントしている。

らん」と語っている。また、人や建物の数が多い都心
部よりも、ピオレという1つの施設に全ての店舗が集
約している駅前の方が便利であるとも感じている。

以上の語りより、3名とも買い物をする、映画を見
る、外食をするといった余暇行動を完結させられる場
所として駅前を捉えていることが視える。ここで注目
したいのは、姫路市よりも都市規模の小さい鳥取県に
居住するCさんは駅前を「都会」とであると表象し、姫
路市よりも都市規模の大きい大阪府と神奈川県に居
住するBさんとDさんは、駅前を「ちょうど良い」、
「ちいちゃいけど全部ある」と表象していることであ
る。第3表に示す通り、姫路駅に隣接する複合商業施
設のピオレにはあらゆるジャンルの店舗が集約して
いる。また、同じく複合商業施設であるテラッソは、
シネマコンプレックスの「アースシネマズ姫路」を擁
する。すなわち、駅前には余暇行動を楽しみたいとい
う若者の思いを満たすことができる空間なのである。そ
して、この空間は一通りの余暇行動を楽しみたい若者
にとっては「都会」として立ち現れ、疲れない規模で
余暇行動を楽しみたい若者にとっては「ちょうど良い」
ものとして立ち現れてくる。

次に否定的な語りであるが、これは物足りなさや飽
きという感覚が理由となっている場合が多い。Aさん、
Fさん、Gさん、Hさんは駅前に対する否定的な印象を
次のように語った。

筆：(高校生の頃) 駅前に遊びに行く回数ってのは
増えた？

A：増えたな。増えたけど、また比較するものが何
もないから、まあ、普通、ちょうど良いくらい
の店がいっぱいあるかなくらい、じゃない？

筆：確かに。遊びやすいわな。ちょうど良い感じ？

A：まあ、飽きはあるけど。

AさんはBさんやDさんと同じく、「ちょうど良い」店舗が多く立地する空間として駅前を捉えている。しかし、その一方で、その店舗のバリエーションに「飽きはある」とも語っている。

F：本はもう三ノ宮とかで買うようにした。

筆：それは何で三ノ宮で買うようにしてんの？

F：姫路に無いからです。

Fさんは本を購入する際は三ノ宮の店舗を利用しており、その理由として「姫路に無い」ことを挙げている。

筆：(高校生の頃) 買い物のために結構その大阪とか神戸に日常的に行くこともあったん？

G：うーん、日常的、まあ、小中に比べたら増えたよな。(中略) うーん、なんか姫路に無いものの方が増えてきたっていうか、年が重ねるごとに。欲しいなって思うものが姫路駅にこう、ショップが無かったりすることが多かったから、じゃあもう神戸行か、大阪行か、ネットかになってきよったから、かな？

Gさんは年齢が上がるにつれ、欲しい商品を駅前で手に入れることが難しくなっていたと語った。そのため、神戸や大阪の店舗に直接出かけたり、インターネットを利用したりする機会が増えていったと述べる。

H：あそこ〔筆者注：駅前〕は何かもう毎週行くようなところではないよね。なんか、見飽きるほど、なんか見尽くせへんほど何かがあるって感じじゃないから、もっとなんか服のお店とか、雑貨のお店とかあったら良いのになって、(中学生の頃) 思ってた気がする。

(中略)

筆：なるほどね。じゃあ、ちょっとそういうとこ

ろに若干の不満みたいな。

H：うーん、あ、飽きるなみたいな感じやったかな。

Hさんは中学生の頃、駅前の服や雑貨を扱う店舗の種類に不満を感じていたという。そして、「飽きる」という感覚を語っている。

Fさん、Gさん、Hさんは欲しい商品を駅前で購入できなかった経験を持つ。また、AさんとHさんは店舗のバリエーションに飽きを感じると語った。駅前には、若者をターゲット層とした幅広いジャンルの店舗で構成される商業施設がピオレ以外に存在しない。大阪や東京の都心部のように複数の商業施設が林立する環境ではないため、店舗や品揃えのバリエーションには限界があり、それが若者の駅前に対する否定的な印象を生み出している。つまり、駅前への肯定的な語りの要因である「ちょうど良い」規模で一通りの余暇行動を楽しめるという特質が、物足りなさや飽きという否定的な語りの要因にもなっているのである。ここに駅前という空間の両義性を見出すことができる。

3) 駅前の整備がもたらす影響

駅前では2011年から2015年にかけて大規模な整備が実施されている(第5図、第6図)。姫路市による都心部のまちづくりの中核として行われたこの整備によって、駅前は国内最大級の駅前広場へと生まれ変わった⁸。整備を機にいくつかの施設が新たに誕生したが、特に注目すべきなのは、2013年のオープン時点で姫路市初出店の店舗がテナントの約7割を占めていた⁹ピオレであろう。ピオレの開業によって、駅前での買い物行動の選択肢は大きく広がったのである。

整備前の駅前の様子を覚えているか対象者に尋ねたところ、8名中6名が覚えていないと答えた。対象者が駅前を初めて経験した時期は、聞き取り調査からおおむね中学生から高校生の間であると判明している。そして、対象者が現在18歳から22歳であることを考えると、それは2013年から2016年頃のことになる。つまり、ピオレのオープン直後の2013年から整備全体が完了して間もない2016年の間に、対象者の駅前での経験は形成され始めた。そのため、整備をきつ



第5図 整備前の駅前（2007年）

姫路市ホームページより引用

(<https://www.city.himeji.lg.jp/shisei/000000>

2164.html (2022年12月9日最終閲覧))



第6図 整備後の駅前

2022年12月19日筆者撮影

かけに駅前の景観が変化するという実感を有してはいない。

一方、DさんとHさんは、整備前の駅前の様子をわずかながら覚えており、特にHさんは以下のように語った。

筆：あのさ、ピオレができたみたいな時期があつて、それより以前の姫路駅を覚えてるかどうか。

H：覚えてる。

筆：覚えてる？これ、この写真覚えてる？（第5図を見せる）

H：いや、これはびっくりやわ。

筆：(笑) どういうこと？

H：いや、ここまで解像度高くなかったし、こんなに何も無かったんかと思って。

H：やっぱピオレとかできたんおっきいわ。ちょうど、なんかその遊びに行きたい期にそういうのがあったっていうのがまだ良いかなって思うことに、イメージアップに繋がった気がする。

筆：じゃあなんかここまでよく覚えてはないけれども、(中略)ここ〔筆者注：旧駅ビル〕を潰してピオレができたってのは多分、自分の中の良いイメージに貢献してるみたいな感じ？

H：うん、そうやな、何も無かったのにあれ〔筆者注：ピオレ〕ができてくれてありがたいな。

Hさんは整備前の駅前には「何も無い」と感じており、ピオレのオープンが駅前に対して肯定的な印象を抱く要因になっていたと気付いたようである。駅前を頻繁に利用し始めた時期に、若者をターゲット層とする新たな商業施設が誕生したことが、彼女の駅前に対する印象に寄与していた。そして、整備前の駅前の様子を覚えていないと語った6名についても同様のことが言える。例えば、Eさんは高校生の頃に経験した駅前を次のように語った。

E：青春の場でございますね。青春の場ですね。なんか、1番遊んでたし、そんな時〔筆者注：高校生の頃〕。

E：ピオレしか行くところないからね。ピオレばっか行ってた気がするな、遊ぶとしたら。

E：ピオレの屋上とか大手前公園とかあとシロトピアの公園とか、あとなんや、まああとはピオレ前のあの公園〔筆者注：キャッスルガーデン〕とか、公園みたいなこととか。写真撮って、ちょっと何か食べれて、できたら良いわぐらいのノリでやってたから、その辺でなんかもうよくワチャワチャしてた記憶はある

Eさんはピオレや、ピオレ前に整備された沈床庭園のキャッスルガーデンで友人と過ごすことが多かったといい、駅前を「青春の場」という言葉で表象している。やはり、整備を機に誕生した施設が駅前への肯定的な印象と結び付いている。つまり、若者の余暇行動を充実させられる駅前という空間の大半は整備によって生み出されており、こうした駅前の空間的な特質が、姫路市に対する若者の地域認識を形成する要因の1つとなっている。

Ⅲ. 姫路駅の立地と移動の経験

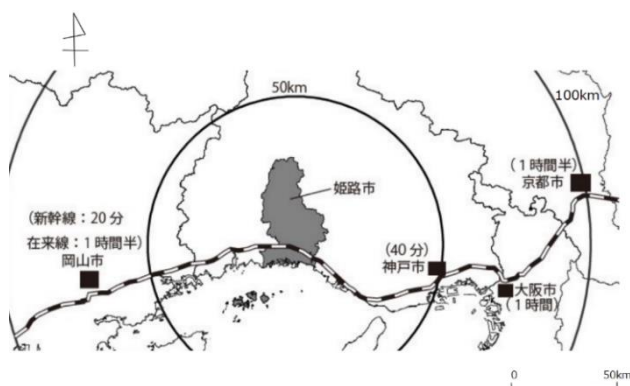
1) 姫路駅の立地

姫路駅は新快速電車と新幹線の停車駅であり、京阪神や東京、岡山といった主要都市へと乗り換え無しで移動することができる（第7図）。

藤目節夫氏は、クオリティ・オブ・ライフ（生活の質、以下QOLと略）の評価が個人の居住する市町村の指標のみならず、日常的にアクセス可能な隣接市町村の指標にも規定されることを指摘する（藤目1997:13）。ここでいう指標とは、「買物・交通の便」、「都市アメニティ」、「職業・賃金」、「自然環境」などである（藤目1997:7）。

QOLの評価が、日常的にアクセス可能な周辺市町村の指標に影響されるという視点は、姫路市にも適用できる。対象者が姫路市の立地について言及した語りの一部を、以下に示す。

E: ちょうど良いなって思ってる。住むのも、遊ぶ



第7図 姫路市と主要都市の位置関係

ArcGISにより筆者作成

場所もね、めっちゃあるわけじゃないんやけど、逆に出たらあるやん、すぐそこに。京都も行ける、大阪も行ける、神戸も行ける、岡山も行ける、みたいな。行ける場所がいっぱいあるから、なんだかんだで遊ぶ場所はあるし、でもちょうど良い、暮らしやすい。で、車でちょっと行こうと思ったら田舎のどこまでピッて行けるし。

Eさんは京阪神や岡山といった「遊ぶ場所」に恵まれており、かつ「ちょうど良」くて暮らしやすい環境の「姫路」に満足感を抱いている。

筆: 姫路の立地に対してはどう?

H: あー、立地は良いと思う。だって都会にも田舎にも行けるから。

筆: お、田舎というのは? 例えば?

H: え、なんかあの、岡山の方にも行けるし。あの蒜山とかやったら1時間半くらいで行けるし。

Hさんも「立地は良い」と語っており、その理由として「都会にも田舎にも行ける」ことを挙げている。すなわち、神戸のような規模の大きい都市と、蒜山のような自然豊かな環境の両方にアクセス可能な姫路市の立地を良いと感じている。EさんやHさんの語りから、周辺市町村の「都市アメニティ」や「自然環境」が姫路市のQOL評価を上げていると捉えられる。そして、周辺市町村の指標を姫路市民にとって日常的に利用可能なものになっているのが、姫路駅から広がる交通網である。京阪神の主要都市と、姫路市よりも規模の小さい都市や自然に恵まれた地域のどちらにも比較的容易に移動できる姫路駅の立地が、若者の地域認識の肯定的な面を形成している。

その反面、主要都市へ日常的に移動できる環境が、「姫路」に対する否定的な視点に繋がっていることも事実である。

筆: (高校生の頃) 大阪とか神戸に頻繁に自分で行くようになってから姫路に対する見方とか変

B: やっぱしょぼいになって感じやな、中学生の時はさ、初めて自分たちで遊べるようになってデカって思ってたけど、やっぱ大阪とか行っちゃったら綺麗やしでかいしおもしろいし、しょぼいになって思ってた。

筆：Gさんは割と中学校の頃から、子どもたちだけで神戸とか大阪（中略）に遊びに行くことってあった？

(中略)

G: あるな。なんか自分の中では姫路駅とかって栄えと思うと思ったけど、違うとこ行ったら全然違うやん、やっぱり。お店の、そもそものお店の、なんて言うん、種類やったりとか、なんて言うんやろ、トレンドなお店とかが大阪とかに行ったらあるけど、(中略) あーでも姫路には無いんかみたいなのとこがあったりとか。

つまり、姫路駅の立地と交通の便は、成長とともに行動範囲を広げていく若者に、神戸や大阪と駅前を比較する視点を与える。そして、その比較の視点によって、若者は主要都市よりも規模の小さい駅前、ひいては「姫路」に否定的な印象を抱く場合がある。京阪神の主要都市に日常的にアクセスできる姫路駅の立地の良さは、かえって若者の地域認識に否定的な要素を付加する一因ともなっている。駅前と同様に、姫路駅の立地と交通の便も両義性を持つ存在なのである。

a. 進学先・就職先の選び方

[illegible]

ArcGIS により筆者作成

第4表 市内大学の学部・学科

大学	学部・学科
兵庫県立大学	工学部
	環境人間学部
姫路獨協大学	人間社会学群（外国語・法学・経営学）
	医療保健学部
	薬学部
	看護学部
姫路大学	教育学部
	看護学部
姫路日ノ本短期大学	幼児教育科
豊岡短期大学	こども学科

わせて進学先や就職先を選んでいった結果、全ての対象者が姫路市からの移動を経験することになった。現在まで姫路市に住み続ける3名も、市外に進学することを選んでいく。

姫路市に住み続けながらも市外に進学するという選択では、市内にキャンパスを置く大学の存在も影響していると推察される。現在、姫路市には兵庫県立大学（以下県立大）姫路工学キャンパスと姫路環境人間キャンパス、姫路獨協大学、姫路大学、姫路日ノ本短期大学、豊岡短期大学姫路キャンパスの5大学6キャンパスが立地する（第8図）。また、市内の大学が有する学部・学科は第4表の通りである。聞き取り調査において、これらの大学が進学先の候補として挙がっていたか、また、進学したいと思っていたかを尋ねた。

筆：今姫路にある県大〔筆者注：県立大〕は工学部、書写の工学部と、あと、あの市姫〔筆者注：姫路市立姫路高校〕の近く的环境人間。環境人間は文系からも行けるで。

A：行つとる子そんなおらん。みんな理系。

筆：Aさんは考えへんかったやろ？1人暮らしやし。

A：1人暮らしな上に、学部無いしな。基本的に歴史学系の文系学部か、教育学部かで絞ってたから。

Aさんは1人暮らしをしたいという希望を満たせず、また、関心を持っていた学部が存在しないという理由

で、県立大が進学先の候補には入っていなかったと語った。

筆：市内の大学、主に県大はあんまり視野に無かったかな？

H：あー、それはなんかあったか、あ、まああった。

なんか第何とか希望みたいなのには書いてあったかもしれへん、一応。なんか10個ぐらい書いて言われたら1個は入ったかもしれへんけど、でもちょっと偏差値が県大を目指すよりはもうちょっと上やったから、それやったら、まあなんかもうちょっと上の方が良いんじゃないっていうので希望、希望ではなかったな。

Hさんは志望校をできるだけ多く挙げる必要がある際には、下位の方に県立大を記入していた。しかし、学力の層が自分と合っていなかったため、「希望ではなかった」と語った。

AさんとHさんを含め、大学進学を経験した7名全員が、市内の大学を積極的に志望することはなかった。理由としては、1人暮らしへの意欲を満たせないこと、関心のある学部が無いこと、自分の学力と合っていないことなどが挙げられる。このことから、姫路市の高校生が大学進学を考える場合、市内では希望条件をクリアすることが難しく、市外への進学という選択肢が浮上することが多いと推察される。つまり、1人暮らしをするかどうかに関わらず、姫路市の若者は市外を日常的に経験する機会が多い。したがって、移動の経験は若者の姫路市に対する地域認識に影響力を持つと考えられる。

b. 移動に関わる語り

聞き取り調査を通して、既に姫路市を離れているかどうかによって、対象者の地域認識に違いが生まれることを確認できた。現在、姫路市外に居住する人は「姫路」に対して肯定的な語りを見せる場合が多かった。

B：もう家。姫路イコール家やもん。なんか、友達に話すときも今まであんなにしょぼーしか思

ってなかったのに、めっちゃ姫路ええでしか言わんし、めっちゃ自慢すんねん地元を。良いところやでって。

筆：じゃあ、(姫路市を離れてから) 見方は良い方
に変わった？悪い方に変わった？

B：もちろん良い方。

Bさんは、実際に住んでいた頃は「しょぼー」と思っていた「姫路」を、引っ越してからは良い所であると周囲に自慢するようになったという。そして、「姫路」への見方が良い方に変わったと明言している。

筆：どの辺りが便利やと思う？姫路の。

C：姫路の？まあ、ちゃんと姫路駅周りがある程度
発展してる。うーん、まあ駅もそんな遠くない。

筆：遠くない、その、どこから遠くない？

C：まあ自分の、地元の方から近かったし、住んで
る所によるんやけど。(中略) 姫路の中でも、
播但線とか。姫路でも南の方とかは色々、山電
〔筆者注：山陽電鉄〕とかあるやん。やから交
通の便は結構良いんじゃないかな。ある程度
良いかな。

筆：それは、昔から思ってた？それとも何かをき
っかけに思うようになった？

C：鳥取来てからじゃない？

Cさんは鳥取県に移動して初めて、駅前の発展具合
や姫路市の交通の便の良さに気付いたと語った。

D：今まで横浜も行ったことなかったけど、テレビ
とかで見たり観光パンフレットとかで見たら、
あの綺麗な部分が凄く載ってるから、わあ！
みたい。そしたら、私の大学ほんまに下の方
やねん、ほんまに横須賀寄りなんよな。(中略)
住んだらマジで姫路駅よりなんも無い。(中略)
私の家で2, 30分掛かるんよな、横浜駅まで行
くんに。で、交通費も掛かるし時間も掛かる、
2, 30分。今まで5分10分で行けよったんが、

ってなったから姫路駅の方が楽やなってか姫
路の方が栄えとる、今住んどる環境と比べると。

Dさんは姫路市よりも都市規模が大きい横浜市に居
住しているが、自宅周辺の環境は姫路市に住んでいた
頃の方が便利であったと語っている。つまり、姫路市
を離れてから駅前、ひいては「姫路」の発展具合に気
付いたのだと思われる。

以上の肯定的な語りの要因として、主に駅前の規模
や交通の便の良さがあり、第Ⅱ章や前節の議論と一致
する。Hさんが「(姫路市の) 立地は良いと思う」と語
っていることから、現在姫路市に残る対象者も、駅前
の規模や交通の便の良さを理由に「姫路」にある程度
の肯定的な印象を抱いているのは確かである。しかし、
姫路市を既に離れている対象者の場合、移動先の都市
を知り、その都市と姫路市を比較する視点を持つよう
になる。すなわち、他の都市との比較を通して「姫路」
を相対化して見ている。この相対化の視点により、実
際に住んでいる頃には気付かなかった「姫路」の良さ
や特徴を見出し、肯定的な表象が増えたと言えよう。
このことは、以下のEさんの語りからも覗き知れる。

E：外に出て行ってから私も帰って来たいって思
うようになったから、出ないと分かんないこ
とがいっぱいあった。一旦出ないと多分帰り
たいって思ってたなと思う。出たいしか
一生思ってたなと思う。

一方、現在も姫路市に居住する対象者はどちらかと
いえば否定的な言葉を見せる場合が多い。

筆：まあ今までよりもより毎日さ、神戸に触れる
ようになって、姫路に対する印象(中略) っ
てどうですか？この1年ぐらいで。

G：(中略) ほんまに中途半端というか、いや、中
途半端って言い方は良くないよな。なんか、良
い言い方すると、都会でもないし、田舎でもな
いから生活に困ることはないって感じかな。

まず、「姫路」への今の印象を聞かれた際の一言目として「中途半端」という否定的な言葉を用いている。その上で、「生活に困ることはない」という肯定的な語りを付け加えている。Gさんは神戸市へと通学しており、その点では姫路市と他の都市を比較する視点を持つ。しかし、比較する都市に実際に居住しているわけではないため、姫路市を離れた対象者よりも相対化する感度が弱いのだと推察される。つまり、「中途半端」と感じている「姫路」が実は他の都市と比べると利便性の高い場所であったり、あるいは生活しやすい規模であったりする自覚を得られていないのである。

G: その進路決める時とかは、全く家出たいとか思ってたなかったんよ。でも、今はもうさっさと姫路を出て行きたいっていう感情が芽生えよう。

筆: なんで姫路を出て行きたい?

G: なんやろ、なんか、こう人によるんやろうけど、姫路の印象があんまり良くないんよ。(中略) なんか、あー、自分的にはそんな思ってたけど、言われてみたら確かになって思う部分があったりして、(中略) もう姫路におりたいとは正直思わへんな。

筆: ほー。その印象が良くないって、周囲の人から具体的に言われた要因って何?

G: 要因? 何個かあるんやけど、(中略) まずは、こうきつい人が多いみたい。それと方言の理由、せいなんよな。やったりとか、運転が荒いから、ナンバーを見た時に、なんて言うんやろ、避けたくなるみたいな話をしてくれたりとか、があつて。やっぱり、その運転が荒いっていうことは気性が荒いみたい、こうちょっと短気の人が多かったりとか。(中略) 姫路の印象ってあんまり良くないんかなとかって思い始めた。

また、Gさんは早く姫路市から出て行きたいようであり、その理由として「姫路」の印象が良くないこと

を挙げた。周囲からの評判が良くない「姫路」に実際に住んでいることへの嫌悪感が生まれていることが視える。同じくHさんも、「姫路」に対して否定的な印象を抱いている。彼女は、通学先の岡山県で地域のために活動する人と関わる機会が増えた経験をもとに、次のような思いを語った。

H: 姫路はなんか生活が満たされてるが故にあんまり向上心が無いんじゃないかみたいな。こう変えていきたいみたいな大人の姿が、まあ私が姫路をフィールドとしてないから見えてないんかもしれんけど、あんまりその感じられへんなって思っ。(中略) ま、ちょっとマイナスイメージが加わったよな。

Hさんは岡山県よりも姫路市の利便性の方が高いと感じているため、「姫路」は生活が満たされているという思いを持っている。彼女のこの語りは、岡山県と姫路市を比較して生まれたものである。すなわち、ここでも相対化の視点が働いていると言えるが、姫路市外に居住する人が相対化の結果として肯定的な語りを見せたのとは正反対に、「マイナスイメージが加わった」と明言している。地域を良くしたいという思いを「姫路」で感じられないのは、彼女が実際に姫路市に住んでおり、「姫路」という場所を毎日経験しているからであろう。つまり、自分の身近な所に「姫路」が存在するからこそ、「姫路」という場所の性格を細部まで感じていると思われる。それゆえ、現在も姫路市に居住する人は、そうでない人よりも「姫路」のネガティブな要素を感じとりやすく、否定的な印象を抱きやすい。姫路市を他の都市と比較し、相対化する視点を若者に与えるという点で、移動の経験は若者の地域認識の形成に影響力を持っている。

IV. 地域認識の構造と形成過程

1) 地域認識の構造

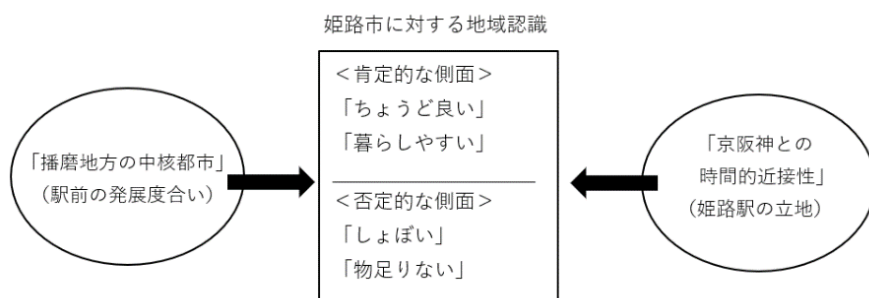
ここまでの議論で、若者による姫路市の地域認識を形成する要素として、駅前、姫路駅の立地、移動の経験が大きな影響力を持つことを読み解いてきた。この

3 要素が地域認識において存在感を持つのは、姫路市が「播磨地方の中核都市」と「京阪神との時間的近接性」という空間的特質を有しているからである。第Ⅰ章で述べた通り、姫路市は播磨の中心という性格を自認している。姫路駅に主要列車が停車して各主要都市へとアクセスし

やすくなっており、その周辺に広がる駅前が一通りの余暇行動を完結させられる規模に発展しているのも、姫路市が播磨地方の中核都市であることを示していると言えよう。また、姫路駅から京阪神の各都市へと40分から1時間半で移動できることは、姫路市が京阪神との時間的近接性を持っていると言い換えられる。

杉山和明氏によると、夜中の富山駅周辺にたむろする若者は異性と「出会いたい」という欲望を達成し、自らがそのドラマの主演になれるような人々の交流を出現させる機能施設が集積し、雑踏や賑わいに溢れた空間を主観的に切り取って認知する。そして、単なる街路としての空間に「遊びの場」や「安らぎをもたらす」という意味を付け加え、空間を主観的に変革していく。この体験の中で育まれる空間への愛着を語る言葉が、空間に「場所イメージ」を与え、環境としての地理的空間が場所へと生成していくのである（杉山1999：12）。

では、姫路市の若者はどのような思いや欲求に基づいて姫路市という空間を読み、「姫路」という「場所」を形成しているのだろうか。余暇行動を満喫したい若者は、一通りの余暇行動を体験できる駅前という空間に、「都会」や「ちょうど良い」という評価を付与する。また、神戸や大阪といった規模の大きい都市に出かけたいという願いを叶えやすい姫路駅の立地や交通網に対しても、肯定的な印象を抱いている。駅前に対する肯定的な認識は、「姫路」全体の肯定的な認識に結び付いていく。また、姫路市から離れて他の都市を経験し、姫路市の空間的な特質をより強く実感することも、肯定的な地域認識に影響している。一方、姫路市外に移動する機会に恵まれている若者が、主要都市に比べ



第9図 地域認識の構造

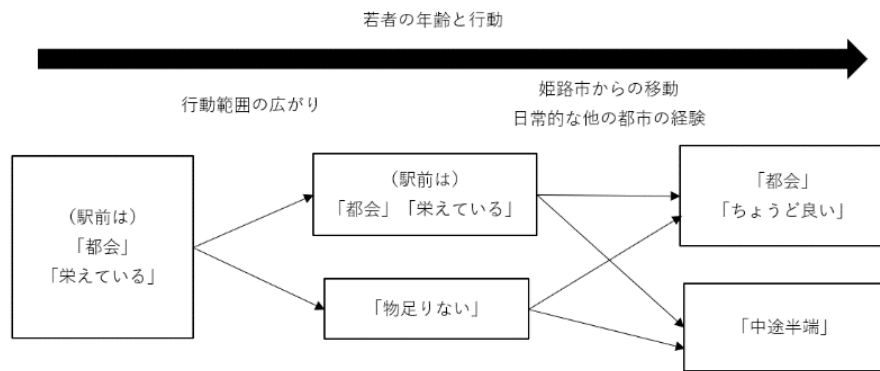
ると規模が小さく、店舗の種類も少ない駅前に不満感を覚えることも事実である。つまり、大都市と同じ環境で余暇行動を楽しみたいという欲求を満たせない空間として駅前を捉え、「しょぼい」や「物足りない」という言葉で表象するのである。こうして、「姫路」全体への否定的な認識も形作られる。姫路市に住みながらも市外への移動を日常的に経験する人ほど、このマイナスイメージを強く抱く傾向にある。

すなわち、姫路市の若者は駅前での余暇行動、姫路駅からの鉄道利用、姫路市からの移動を通して「播磨地方の中核都市」と「京阪神との時間的近接性」という姫路市の両義的な空間的特質を実感する。そして、この特質に基づき、肯定的な面と否定的な面が共存する両義的な地域認識を形成していくのである（第9図）。

また、姫路市が「播磨地方の中核都市」である1つの象徴は、駅前の発展度合いと利便性の高さであり、「京阪神との時間的近接性」にとって必要不可欠な存在が姫路駅である。それゆえ、姫路市の若者は駅前という空間を核に、「姫路」という「場所」を獲得していくと言えよう。

2) 地域認識が形成される過程

では、姫路市の若者の地域認識の構造は、どのような過程を経て形成されるのであろうか（第10図）。聞き取り調査を通して、対象者の行動範囲が広がるとともに地域認識のあり方も変化していくことが視えた。まず、中学生から高校生にかけてそれぞれが駅前での経験を持ち始めると、駅前に「都会」や「栄えている」といった肯定的な印象を持つ傾向にある。姫路市の中心部である駅前に肯定的な印象を抱くことは、「姫路」



第10図 地域認識の形成過程

全体に肯定的な思いを持つことにも繋がる。その後、神戸や大阪まで行動範囲が広がると、京阪神の主要都市と駅前を中心とした姫路市の規模を比較する視点が生まれる。そして、人によっては「姫路」が自分にとって物足りない場所であると思い始めるのである。この後、大学および専門学校への進学や就職を機に姫路市を離れた若者は、移動先の都市を知ることで「姫路」を相対化して見るようになる。その結果、今まで気付かなかった「姫路」の良さや特徴が見えるようになり、肯定的な印象が強くなりがちである。すなわち、一通りの余暇行動を完結させられる駅前の利便性や交通アクセスの良さが、「姫路」の良い特徴であると気付くのである。一方、姫路市に残った若者は引き続き「姫路」を身近な所で経験し続けるため、市外に転居した人よりもネガティブな要素を感じとりやすい。そのため、否定的な印象が強めになる傾向が見られる。

ここで留意したいのは、地域認識の形成過程には個人によって揺らぎがあることである。姫路市に対して若者が抱く地域認識の形成過程には一定の枠組みが見出されるものの、若者はその枠組みの中を柔軟に行き来している。

V. おわりに

本章ではこれまでの議論をまとめ、今後の課題を述べる。

まちづくりアンケートや寿賀ほか(2022)によって、①駅前には利便性が高いと認識されている、②若者の定住意欲や愛着の度合いが小さいという2点を、姫路市

に対する地域認識の傾向として見出すことができる。この傾向が生まれる理由として、筆者は駅前、姫路駅の立地、移動の経験という3要素を仮定した。そして、若者の地域認識の実態や形成過程について、姫路市出身の8名の若者を対象に聞き取り調査を実施した。その結果、

若者の地域認識は、「播磨地方の中核都市」と「京阪神との時間的近接性」という姫路市の空間的な特質とともに、肯定的な側面と否定的な側面が共存する両義的な存在であることが明らかになった。すなわち、「播磨地方の中核都市」として発展してきた駅前や、京阪神を日常的に経験できる時間的近接性が、「姫路」に良い印象をもたらす一方、「京阪神との時間的近接性」によって若者が駅前の規模に物足りなさを覚え、「姫路」全体にマイナスの印象を付与していくのである。この地域認識の構造は、おおよそ以下の流れで形成されていく。中学生から高校生にかけて、駅前や「姫路」に肯定的な印象を得た後、行動範囲が広がると、駅前の規模の小ささに物足りなさを覚え、否定的な印象を抱く。そして、進学や就職を機に姫路市から離れると、相対化の視点によって「姫路」の特徴に気づき、肯定的な印象を強めていく。一方、姫路市に残った場合、身近な「姫路」にネガティブな要素を感じ、否定的な印象を抱きがちになる。

筆者が実施した調査対象者は大半が女性で、大学等に進学した者のみである。また、市内北部や東部出身者の話を聞けていないなど、属性の偏りは否めない。今後、調査対象を増やし、姫路市と人口規模や都市機能が類似する他市町村との比較に取り組んでいけば、姫路市に対する若者の地域認識の輪郭をさらに明確化できると期待されよう。

文献

市川和子(2009):「水戸駅という若者の居場所」, 人文

地理 第61巻第2号, pp. 126-138

今里悟之 (1999): 「村落空間の社会記号論的解釈とその有効性—玄界灘馬渡島を事例として—」, 地理学評論 Ser. A72 巻5号, pp. 310-334

内田順文 (1987): 「地名・場所・場所イメージ—場所イメージの記号化に関する試論—」, 人文地理 第39巻第5号, pp. 391-405

ケヴィン・リンチ (丹下健三・富田玲子訳) (2007): 『都市のイメージ 新装版』

壽賀菜々葉・岡田ほのか・大西飛勇吾・中島勇風・村田萌々香・太田尚孝 (2022): 「一人暮らし大学生の住環境と定住意欲に関する調査—兵庫県姫路市を事例として—」, 兵庫地理 67, pp. 103-111

杉山和明 (1999): 「社会空間としての夜の盛り場—富山市『駅前』地区を事例として—」, 人文地理 第51巻第4号, pp. 396-409

高野岳彦 (2013): 「場所」, 『人文地理学事典』, 丸善出版, p. 106

姫路市、「姫路市まちづくりのためのアンケート報告書【概要版】」, 2019

(<https://www.city.himeji.lg.jp/shisei/0000003769.html> (2022年10月26日最終閲覧))

姫路市、「連携中枢都市宣言」, 2015

(<https://www.city.himeji.lg.jp/shisei/cmsfiles/contents/0000006/6495/2015312193814.pdf> (2023年4月9日最終閲覧))

藤目節夫 (1997): 「近接性を考慮したQOLの評価」, 地理学評論 70A-4, pp. 235-254

山口泰史 (2018): 『若者の就職移動と居住地選択—都会志向と地元定着—』, 古今書院

(おかわ さわ・神戸大学文学部)

¹ 姫路市北部に位置する兵庫県神河町出身の俳優のんさんが、姫路市の観光サイトに寄せた言葉に「神河町で生まれ育った私にとって姫路は『一番近い都会』でした。」とある。これは播磨地方において現在の姫路市が置かれている都市としての位置付けを端的に表していると言える。(『私に一番近い都会』のんさん、姫路観光PR市の特設サイト『ひめじかん』神戸新聞、2023年2月19日、朝刊、p. 21)

² 姫路市、「姫路市まちづくりのためのアンケート調査」, 姫路市ホームページ、<https://www.city.himeji.lg.jp/shisei/0000003769.html> (2022年10月26日最終閲覧)

³ 市民は姫路駅周辺地域のことを「駅前」と呼ぶ場合が多いため、以下では駅前と記述する。

⁴ 兵庫県、「推計人口」, 兵庫県ホームページ、<https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk11/jinkou-tochitoukei/suikijinnkou.html> (2022年12月21日最終閲覧)

⁵ 姫路市、「地方分権時代の旗手・中核市」, 姫路市ホームページ、<https://www.city.himeji.lg.jp/shisei/0000007190.html> (2022年12月21日最終閲覧)

⁶ ひょうご観光本部、「播磨エリア」, 兵庫県観光公式サイト、<https://www.hyogo-tourism.jp/area/harima/> (2022年12月18日最終閲覧)

⁷ 姫路駅付近には「駅前町」の名前を持つ地域も存在するが、ここではその地域区分に関係なく、若者が想像する駅前という空間を重視したい。内田 (1987) は、人間は個人的なイメージを内容として持つ「場所」に、自分自身のルールで自分自身にしか通用しない地名を与えるとする。したがって、若者1人1人が駅前だと感じている空間について検討することにより、地域認識のあり方に的確にアプローチできると判断した。

⁸ 姫路市、「姫路駅北駅前広場の整備について」, 姫路市ホームページ、<https://www.city.himeji.lg.jp/shisei/0000002164.html> (2022年12月9日最終閲覧)

⁹ JR西日本、「JR姫路駅に『piolo 姫路』が4月30日(火曜日)グランドオープン!」, JR西日本ホームページ、https://www.westjr.co.jp/press/article/2013/02/page_3320.html (2022年12月9日最終閲覧)